
君と僕

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕

【Zマーク】

N2124H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

僕は君の事が好きだよ。言葉が通じ合えなくとも、いつも君の涙をぬぐいたいと思っているんだ。そんな僕の朝のワンシーン。

君は今朝も起きてすぐに涙を流していた。

一緒に寝ていた僕は、君の温もりが途切れたのに目を覚まし、その横顔を見つめる。

やり場のない哀しみが滲んだ君の目は、少し赤くはれていて、遅くまで泣いていたんだとわかった。

今日も晴れるよ

今日も朝は来たんだよ

僕はそれを知らせたくてカーテンを開けて見せる

窓の向こうに広がった青い空は、どこまでも果てがなく、君は差し込む青の眩しさに目を細めて泣き笑いの顔をした。

君の冷たい頬を温めようと、キスをし頬を寄せた。
君は溜息のような笑みをこぼし、僕の体温にすがりつぶ。

ねえ、どうしたらアイツの事を忘れるの?
ねえ、どうしたら君の痛みはなくなるの?
ねえ、僕は君に何ができるのだろう?

ここにいると伝えたくて、身をいつそう寄せてみる。

君は僕のぬくもりに顔を埋める。

僕は君の香りとその柔らかな感触に目を細めながら、君の涙を感じてやるせない気持ちになった。

君は独りじゃないんだよ。

そう伝えたくても、君の耳に僕の声は届かない。

哀しみに沈むのはそろそろやめにしないか？

泣いたって、アイツはもつ君を温めてくれやしないんだ。

「そうだよね

僕の心の声が聞こえたのかと驚いて顔を覗き込んだ。君は寝不足の酷い顔から涙を拭うと、僕の背を撫でた。

そっと君がもう一度空を見上げる。

アイツに話しかけるように、静かに、静かに。

冷たい現実は君の涙を誘つかもしれないけど、君には僕がいるよ。

僕と君の持つ言葉は違うけど、僕は君の傍から離れない。

僕の命は君より長くはないけど、僕はその日までずっと君を見守るつて誓つよ。

だから
だから
どうか

「こいつか。朝じはん、食べなきやね」

君が僕を振り返った。

僕は嬉しくて思わず声を上げる。

君はベッドから足を下ろす。

僕は飛び降りる。

「こつものより奮発しちゃおつか

君の声にいくらかの灯りがともつたのが見えて、僕はまた嬉しくなつて声を上げた。君は「本当に食いしん坊ね」そういうつて缶詰に手をかける。

君を見上げる

僕は君の親友

僕は君の家族

永遠に言葉を交わせないもの
永遠にこの想いを伝えられないもの

吾輩は

猫である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124h/>

君と僕

2011年1月7日02時10分発行